

東京遠征が学生達にもたらした役割期待

追手門学院大学上方文化笑学センター所員・社会学部 横田 修

ケラリーノ・サンドロヴィッチ氏の戯曲『ウチハソバヤジャナイ』（1995、ペヨトル工房）は、氏がまだ劇団健康で活動していた頃の作品である。ケラリーノ・ナンセンスの金字塔と言われる本作はいくつもの物語が絡み合っているが、その一つに間違い電話から始まるエピソードがある。ある日、夫婦の家に一本の電話が入った。妻は「ウチはソバ屋じゃありません」と答えるが、ジャンジャン電話が掛かってくるうちに、気がつけば妻はソバ打ちの準備を始めて出前に勤しむようになるのだ。

さて、ある種の役割期待（間違い電話）に答えるように、やりたくもない行為を始める（ソバ屋を始める）なんて、そんなこと現実にあるのだろうかと考えていたら、数年前に似たような状況を目撃したことを思い出した。舞台となるのは私が顧問を務める STEP だ。STEP とは、追手門学院大学社会学部の舞台表現プロジェクト（STage Expression Project）の略称である。学生とプロのアーティストがしっかりと手を組み、一般の観客の鑑賞に堪えうる舞台芸術作品（主に演劇）を創作する。『行動して学び、学びながら行動する』スタイルを身につける追手門学院大学が推進する WIL PROGRAM の一つであり、全学部 of 学生が参加可能である。専門的な活動を通して学生達は自身の興味・関心を探るのだ。2016 年 9 月より活動を始め今年で 6 年目となる。

とはいえ、そもそも「役を演じる」とは役割期待に答える役割演技そのものである。つまり演劇とは役割演技のカタマリのような表現行為であるのだから、何を改まると言われたらその通りでだ。しかし今回紹介するのは、少々異なる角度からやってきた役割期待についてである。

今から 3 年前（2019 年）の STEP は、秋の合同学園祭にて『夏至の夜の夢』（脚色・演出＝加藤桃佳（社会学部三回生＊当時／原作＝W. シェイクスピア／翻訳＝河合祥一郎『新訳 夏の夜の夢』（角川文庫））を上演し、翌月には同作品を東京の舞台に上げた。「八王子学生演劇祭 2019」に学生自ら応募して目出度く選考を通ったのである。以下、出演申込書に学生が書いた演出プランを引用する。ちなみにこの年の「八王子学生演劇祭」は課題戯曲から演目を選ぶ形式を取っていた。『夏の夜の夢』も課題戯曲の一遍である。

戯曲名・夏の夜の夢

現在女子大生である私にとって、堅苦しく難しい印象が強かったシェイクスピアの戯曲ですが、喜劇『夏の夜の夢』は女子の心をくすぐる愛に満ちていて、大変興味をそそられました。そこで、この課題戯曲をベースにして、高校生ほど純粋ではなく、ましてや大人ほど現実的でもない、女子大生の妄想に溢れた愛を表現したいと考えました。

演出プランと致しましては、私が『夏の夜の夢』で一番好きなシーンは最後の劇中劇です。恋愛の物語を男子

目線で作っているのですが、その“しょうもない”感じがばかばかしくて面白いからです。

そこで今作では、思い切ってこの劇中劇とその創作過程に焦点を絞り、その内容を「ピラマスとシスビー（著者注・「夏の夜の夢」の中で演じられる劇中劇のタイトル）」から「ハーミアたち4人の若者のカオスな恋愛物語」に書き直すことで、大学生のとびっきりリアルな恋愛模様を描きます。

演出 加藤 桃佳

今読み返しても大変面白そうな内容である。作・演出を担当した学生はシェイクスピア作品を読み込み夏休み全部を使って脚本を書いた。学生達はその脚本を元に、約4ヶ月もの間、舞台創作と本番の日々を過ごしたのである。稽古開始は9月初旬であった。

さて、11月上旬に合同学園祭の本番を終えた学生達は次（東京公演）の準備に入る。同じ演目ではあるが会場の作りが異なるため演出を変える必要があったのだ。大阪公演の会場は追手門学院大学・総持寺キャンパス内、普段は図書館であるアラムナイライブラリー（写真1）。観客は舞台を囲む三箇所の階段に腰掛けて観劇した。対して東京のいちようホール・小ホールはプロセニウム形式の劇場である（写真2）。同じ会場で複数の団体が続けて発表するフェスティバルの最中に、舞台三方へ仮設客席用の階段を組むことは不可能だった。ということはつまり、視線の低



写真1 アラムナイライブラリー（大阪府茨木市）



写真2 いちようホール（東京都八王子市）

い観客にも舞台が見えるように作品を作り直さなくてはいけない。これが地味に大変な作業なのである。もちろん、より良い作品にするために稽古を重ねる必要もあった。学園祭での発表は両日とも満員御礼でお帰り頂くお客様もいる程の盛況ぶりであった。しかし、演劇をあまり観たことのないお客様も多かった。東京の観客はそうではない。演劇が好きな人でなければ観に来ないであろう。身内の観客もいないのだ。

話はここからである。12月に入り稽古も大詰めを迎えた頃、一人の学生が言った。「このままでいいのかな?」。先にも触れたが東京の観客は誰も私たちのことを知らない。八王子学生演劇フェスティバル2019に関西から参加するのはSTEPだけであった。「何かもっと、やれることはないか?」。彼らが考えた末に出した答えは、「取りあえず新喜劇やっつく?」であった。

『夏の夜の夢』は喜劇である。笑える場所が増えるのは良い。今回学生達が創った『夏至の夜の夢』は、河合祥一郎氏が翻訳したシェイクスピアの台詞をベースとしたシーンと、現代の大学生の日常が交錯する構造になっている。現代劇のシーンで出演する俳優達は台詞を自分の日常の言葉に変換して喋っていた。つまり標準語で書いている台詞を関西弁に変換しているのである。しかしシェイクスピアの劇世界は決して新喜劇の世界観ではないし、関西の大学生の日常だって決して新喜劇ではない。「大学生のとびっきりリアルな恋愛模様」と新喜劇の相性は正直良いとは言えなかった。関西を（勝手に）代表して出向くからには、お笑いの一つも噛まないとダメだと考えたのかもしれない。しかしオリジナリティーという観点からも新喜劇である必要性などなかったはずだ。

にもかかわらず、学生達は一生懸命、真面目な顔で全員がひっくり返るシーンの練習を始めたのである。監修として立ち会う専門家の私が止めても無駄だった。むしろ途中から私も面白くなってきて注文をつけたりしていた。東京公演後のトーク・セッションで、総合ディレクターである演出家の中込遊里氏（鮭スペアレ）から「そんなにサービスしなくてよい」と一蹴されてしまったが、学生達に後悔はなかったようである。

『ウチハソバヤジャナイ』の主人公夫妻には、ソバ屋を始めるきっかけとなったいたずら電話があった。今回参加した学生達にしてみれば東京公演がそれに当たるのだろう。このような経験をきっかけに、人は「自分とは何者か」という問いに一つの答えを見つけていくのかもしれない。今回の答えはさしずめ関西人ということか。異文化交流がもたらす不思議な作用を目にした瞬間であった。

